

研究課題：妊婦の口腔・全身状態が新生児及び乳幼児へ与える影響に関する調査（縦断的研究）  
研究者名：高塚 勉<sup>1)</sup>、鈴木 真<sup>2)</sup>、大越 林太郎<sup>3)</sup>、山崎 夏子<sup>3)</sup>、蓮池 祥江<sup>3)</sup>、清水 幸子<sup>2)</sup>、  
江口 徹<sup>1)</sup>、亀田 秀次<sup>3)</sup>、  
所 属：<sup>1)</sup> サンスター株式会社 研究開発部、<sup>2)</sup> 亀田総合病院 産婦人科、  
<sup>3)</sup> 亀田クリニック 歯科センター

### 【目的】

本研究の目的は、①妊婦の妊娠中期の口腔内状態を把握すること、②妊娠中期と産後の妊婦の口腔状態の変化を把握すること、および③妊娠中期の口腔内状態や全身状態と、新生児や二歳児（幼児）との関係を追跡することである。

### 【対象および方法】

医療法人亀田クリニックに通院中の日本人妊婦に、インフォームドコンセントを行い書面による同意を得た。妊娠 20～24 週時に、産科による妊婦検診と同時に口腔内診査を実施した。通常の産科による妊婦検診項目は、年齢、妊娠回数、体重、血圧などであった。更に、血中のプロゲステロン、エストラジオール、エストリオール、プロスタグランジン E<sub>2</sub> 値を測定した。口腔内診査は、口腔衛生状態や歯肉炎症状態、歯石付着状態を記録し、唾液量や唾液緩衝能、齶蝕原性細菌検査を実施した。更に、ポケット深さ（PD）や出血（BOP）を測定した。検査後は、歯肉縁上歯石を除去し、ブラッシング指導などの口腔衛生指導を実施した。

分娩後は、通常の産科の検診項目（出産直前体重、出産直後体重、分娩週数、分娩時間、切迫早産の有無、帝王切開の有無、児体重）を記録した。分娩後 7 日以内に、再度口腔内診査を実施し同様の指標を測定した。分娩後検診を受診した対象者は 113 名であった。

比較対象として、同クリニック歯科センターにおいて、初診時に歯周病と診断され、PD、BOP が記録されていた 20～39 歳の女性 150 名（歯周病一般患者）と、サンスター株式会社勤務の 24～39 歳の女性 46 名（健常人）の PD、BOP データも解析に供した。

### 【結果および考察】

4 mm 以上の PD を持つ部位の割合は、産後では 7.7 ± 9.9（平均値 ± 標準偏差）に対して、妊娠中期では 10.2 ± 10.9 であり、産後のほうが妊娠中期よりも有意（ $p < 0.001$ ）に改善していた。しかしながら、出血部位の割合は、妊娠中期と産後では悪化傾向も改善傾向も認められず、有意な差は認められなかった（ $p = 0.60$ ）。

我々の今回の調査では、妊娠中期の検診後、口腔衛生指導と歯肉縁上歯石除去を実施している。調査対象者全てにおいて、歯石除去を実施しても為害性などの問題は生じなかった。それだけではなく、ポケット深さの改善が示された。妊娠中期においては、歯石除去等の積極的な歯科医療介入をすべきだと考えられる。

また、妊娠中期の歯周状態は、PD に関しては、健常人に比較し有意差に大きいことが認められた。しかしながら、BOP に関しては、健常人と有意差が認められず、歯周病一般患者よりも有意に小さいことが認められた。今回の研究においては、妊娠性歯肉炎は、通常の歯肉炎と少し状態が異なり出血が少ない傾向であることが示された。

また、今回の研究では、早産や低体重児の程度や頻度が少なく、その結果として、妊娠中期の PD や BOP と分娩週数や児体重との関係は有意な相関が認められなかった。

今後は、二歳児の検診をフォローする予定である。